



洗足学園音楽大学
洗足こども短期大学
附属図書館



図書館便り

第15巻 1号
2024年9月1日発行

目次

創立100周年特別企画 落合 俊文 短期大学 学長インタビュー	・・・・・・・・・・	2
私の推薦図書 秋山 徹 先生	・・・・・・・・・・	11
私の推薦図書 尾根 秀樹 先生	・・・・・・・・・・	12
洗足こども短期大学での学び 「ピアノ」 柴田 美奈 先生	・・・・・・・・・・	13
幼教ピアノ 授業風景	・・・・・・・・・・	14
ワークショップ風景	・・・・・・・・・・	15



創立100周年特別企画

落合 俊文 短期大学 学長インタビュー

全号に引き続き、「学長の生の声」を皆様にお伝えするべく、
創立100周年特別企画として図書館職員が落合学長にお話をうかがいました。

先生のご経歴をお聞かせください。

—東京外国語大学外国語学部英米語学科を卒業し銀行に就職しました。海外で仕事をしたいと思い、銀行なら海外での仕事のチャンスも多いと考えたからです。法人の取引などを経験し、念願かなってアメリカジョージア州のアトランタに7年間駐在しました。その後、ご縁あって2005年より洗足学園に勤務することになりました。今年で20年目、あっという間に20年になりました。最初は短大の事務局長、その後幼児教育保育科長となり、現在短期大学学長を務めさせていただいています。ですから、2005年は自分としても青天の霹靂とまでいかないけれど大きく仕事が変わる年でした。



銀行から教育機関への転職というところで何か違ったことはありますか。

—いろいろ思うことはありますが、仕事の種類は違っても、人とかかわる仕事という根底は大きく通じるものがあると思います。

これまでのご経歴の中で、転機になったこと、印象深いエピソードはありますか。

—アメリカに7年間いたことは自分にとって大きな財産となっています。一言では言い表せませんが、いろいろなことが血となり肉となった大きな経験でした。物事の考え方や文化の違い等を通していろいろなことが自分にしみ込んだということはあると思います。

日本とは環境、価値観も違う中で身につけられてきたことが、今も生きているということでしょうか。

—そうですね、もう自分で意識していないところにあるのではないかと思います。いろいろなことを経験してきたということでは、ロードレースもあります。ちょっとしたマラソンのようなものです。自分は中学、高校で野球をやっていたこともあり、走ることには抵抗がありませんでした。アメリカ勤務時代に独立記念日などにアトランタの中でロードレースがあり、これは10キロ、何万人もの人が走る大会なのですが、現地の職員の方から出てみないかということで一緒に走りました。それが面白くてちょっと病みつきになったのです。そのあとハーフマラソンとかフルマラソンも走ってみて、日本に帰ってからも続けています。日本では大きな大会ばかりには出られないのですが、2013年の東京マラソンは走りました。コロナで4年ぐらいは大会もなくなっていたのですが、申し込みはしても抽選に当たらないという残念な状況がコロナ前後からずっとあります。そろそろ当たるかなと期待しています。当たったらぜひ走

りたいと思っています。

転機ということでは、大きく仕事内容が変わることになった洗足に勤務し始めたことです。最初は事務局の仕事をし、その後学科長、学長と自分でもわからないながらも走りながらやってきたという感じです。先ほど申し上げたように根底のところは人と関わる仕事ということであり、全く変わらないとは思っています。



日ごろお仕事をされる際にどのようなことを大切にされ、心がけておられるのでしょうか。

—学生さん第一、学生さんのためであること、というのは常に意識しています。アンケートやいろいろな形で聞こえてくる学生さんの声は、考える上で生かしていきたいと思っています。なかなか学生さんから直接お話しを聞く機会がなくなっているので、そこは極力なんとか作っていかないと意識しています。学長として物事を考え決めていくとき、先生方や職員の方からの要望などに対しても、これをやっていくと本当に学生さんのためになるのかということ軸として持っています。

今までに読まれた本、聞いた音楽で印象深い作品をお教えてください。

—幼児教育保育科にいることもあり、絵本を挙げれば『どろんこハリー』が印象深いですね。お風呂が嫌いな犬が泥んこになって帰ってくるけれど、家族は気づいてくれないというような話。すごく好きです。今も家にありますし、時々手に取ります。あれを読むと、こどもの自由奔放さ、外へ出て泥んこになって真っ黒になるとか、気づいてもらえないけれどあとから気づいてもらったときの様子を描写している絵、ハリーや家族の嬉しそうな表情、一番最後のページにクッションの上にもるまってハリーが寝ているのですが、夢でもみているのか、家に戻ってこられて安心しているのか、それがシンプルな絵ですがほんわかとしたような、今もすごく好きですね。

本についてですが、今でも記憶に残っているのは中学1年生の時の国語の先生が「中学生になったのだから本を読みなさい」とおっしゃって、先生から井上靖さんの『しろばんば』を紹介してもらいました。大正のころの自伝的な話で、人と出会って別れてというようなことが淡々と書いてあるけれど、成長していく小学生の様子が自分に響きました。これが文学か！と



思いました。本を読むことがより好きになりました。そのあと『夏草冬濤』『北の海』と三部作なので続いていくのですが、小説を読む面白さ、いい本を教えていただきました。そのようにして、井上靖、司馬遼太郎、遠藤周作とか、ある一人の作家の作品を集中して読んでいくということはやっていました。

音楽はいかがですか。

—自分の年代として、音楽のジャンルは山下達郎、サザンオールスターズ、桑田佳祐などです。ライブを見に行くことも楽しみしていますが、年々チケットを取るハードルが高くなってしまっていますね。クラシックを知りたいと思い、去年から東京フィルハーモニー交響楽団がやっている『休日の午後のコンサート』のシリーズに行っています。指揮者の方のMCが非常に巧みで、またわかりやすい曲をやってくださったりして楽しみながらも刺激を受けています。

図書館の思い出はありますか？

—小学生の頃は伝記物、エジソン、ベープルースとか野口英世とかを図書館で借りて読んでいました。中学生では先ほどの井上靖、司馬遼太郎、遠藤周作といった作家の作品を借りていました。それが図書館の思い出でしょうか。中学の上級生、高校生になると本も自分で買って揃えたいという気持ちもでてきて、図書館からは足が遠のきました。大学では専門書を借りたり、レポートを書く際に図書館を使ったという記憶がかすかにあります。

本学の図書館の印象はいかがでしょう か。

—恥ずかしながら、あまり足を運ぶ機会がなかったので、先日改めて見に行きました。久しぶりにおうかがいして、とてもきれいで、スペース的にも非常にいい空間でした。PCも増え、大学のコースが増えたことにより、いろんなジャンルの本やCDが揃えてありました。また、レコメンドコーナー、新着コーナー、特集コーナーなどとても工夫されて運営されていると思います。足を運べばいろいろなことが発見できるので、そのことを学生さんにも伝えたいなど改めて思いました。

短大と大学も兼ねた図書館で、どのようにしたら多くの人に利用してもらえるのかと考えながらやっています。図書館というアナログな印象を持たれますが、電子サービスもやっています。スマホでも情報収集ができてしまうような時代、図書館がどのような存在となるべきなのか悩むところです。

—図書館とは違うことですが、町の本屋さんもなくなってきていますよね。経済産業省が書店振興プロジェクトということを出しています。自分の通勤の道中に本屋さんがあるのですが、今年の年明けすぐに「2月末で閉店します」という張り紙があり、それを多くの人が見ていました。その様子を見ていて、本屋さんはなくてはならないものなのかなと思っていました。ほどなくして今度は「大手の書店チェーンが経営を引き継ぎます」と張り紙があ

り、その前を通る人の様子を見ていたら皆さん拍手をしていました。このように本屋さんには、ふらっと立ち寄っていろいろなものを見つけていく、そういう側面があるのでしょうか。図書館の在り方ということには答えにならないかもしれませんが、そんなところにヒントがあるのではないのでしょうか。でも皆さんとても工夫されていますね。

もし、おすすめ図書で入れていただけるなら、『言語の本質—ことばはどう生まれ、進化したか』（中公新書 2756）が良い本だと思っています。発達心理学、言語心理学の今井むつみ先生と言語学の秋田喜美先生お二人で書いておられる本です。赤ちゃんがどのように言葉を習得していくか、人とAIと動物の言葉の捉え方の違い、AIがなぜ赤ちゃんにかなわないかなどが書かれています。オノマトペから考察が始まって、こどものことばの習得、発達過程とつながっていきます。短大生にもかかわるのですが、保育の現場はオノマトペワールドで、日々、先生とこどもでそういった言葉が飛び交っている。また、こどもの言い間違いを著者が掘り下げて、こどもが言葉を習得していくにあたっての適応力を見出していくなど、いろいろな意味で知的好奇心をくすぐられる本でした。

ぜひレコメンドコーナーに入れます！



短大でのカリキュラムについてお伺いします。

アメリカでの幼児教育研修が行われていますが、この研修はいつから始まったのでしょうか。

—8年ぐらい前から実施しています。

具体的にはどのようなことをされているのでしょうか。

—アメリカの西海岸、オレゴン州のポートランドに1週間行って、ポートランド州立大学の附属の保育施設やそのほかの保育施設等を訪問し交流してきます。この研修もコロナで4年ぐらい開催できていなかったのですが、再開後初めての今年3月には、高齢の方の施設と保育園が一緒になっている施設にも新たに訪問しています。午前中ずっと学生と現地のこどもたちが自由に密にかかわることができる等、非常に良い機会をいただいています。この研修を楽しみにして入学してくる学生さんもいます。

なぜ研修先にポートランドを選ばれたのでしょうか。

—ロサンゼルス、ハワイ、オーストラリア、ニュージーランドなど、いくつかの候補地がありましたが、例えばロサンゼルスやニュージーランドなどは個人でも行くことができるだろうと考えました。ポートランドはなかなか個人では訪れないと思います。当時はあまりなじみがないというか、日本人もあまりいないということもあり、だからこそより現地のことがわかるの



ではと思い選びました。ポートランドを下見してみて、治安の良さもありましたし、候補の研修施設では皆さんがフレンドリーで好意的でしたし、歓迎してくださるような雰囲気があったことも決め手となりました。

研修先の治安面のことなど、先生ご自身の駐在経験から得たことが生きているということでしょうか。

—そうですね。また、ポートランドは環境問題への意識がとても高いです。例えば保育の施設にお邪魔しても、いろいろなところから寄付で集められてきた廃材とかペットボトルとかキャップとかを使って日常のものを制作したりという光景を目にしたりしました。街全体の環境問題意識が高いのです。

日本の教育との違いや、学長が今後取り入れてみたいと思われるような教育はありましたか。



— 廃材の活用もそうですし、写真を撮って保護者の方に提示してお子さんの園での様子をお知らせする、日本でもこの方法はだいぶ進んできましたが8年ぐらい前にすでに日常的に行われていて新鮮に感じました。今はiPadなど進んでいますからもっと活用されています。

参加した学生さんが、研修を終えて物事の見方が変わったりといったことはあるのでしょうか。

— そうですね。やはり保育に対する意識がより高まってくるようです。今まで受け身であった学生が自主的に物事に取り組んだり勉強したり、また実際に何名かいるのですが、本学を卒業してからポートランド州立大学の語学研修に参加して現地での保育に就くように勉強するとか、より積極的になるように思います。

この研修が転機になる人もいるということですね。

— そうです。実際にそのような姿を見ていると、とても嬉しく思います。

卒業後、保育の現場に出る人が圧倒的に多いのですが、どういう魅力を備えた人材を洗足学園として送り出したいと学長はお考えでしょうか。また魅力的な人材とはどういう人だと思われますか。

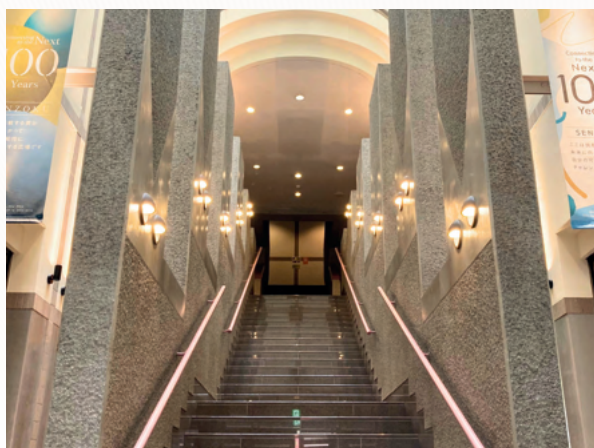
— 洗足では、音楽大学があるということでそこを生かした授業がたくさんあります。表現力を高める授業が多いといえます。ピアノを弾くことを含めて、表現力豊かな学生さんを送り出していきたいと思っています。そのあたりは洗足の特徴ですし、より生かしていきたいなと思っています。

また、2年間で数多くある現場での実習を中心に据えて、きめ細かな指導を行ない、実践力を備えた人材として送り出したいと考えています。

第9の合唱やミュージカルを上演していることは本学の教育の特色ということでしょうか。

— 大人数での本格的な舞台をやっていることは特色といえます。例えばミュージカルであればキャストのほかに衣装、大道具等を制作するア





ートスタッフと呼ばれるチームもあり、みんなで力を合わせて作り上げています。その中でチームワークというか協働の精神もできていくと思います。また、演じる人は、子どもたちの前でいろいろなことをやっていくことが苦にならない、堂々とできるようになっていると思います。

表現力が身についていると考えることができるということですね。

—そうですね。表現力もそうですし、あとは大きなイベントに取り組む機会が多いので、みんなでやっていく協働の力ができる。また、その中で頑張ることができる人であるということです。そして、「表現力」とともに、「実践力」「協働力」を備えた人材として現場で活躍していけると考えています。

そういう頑張る力を育てる一つの機会がミュージカルなどの授業やイベントであるとお考えなのですね。

—そうです。だからこそ、学生の皆さんには是非積極的に参加して頂ければと思っています。

さきほどおうかがいして、職種も違うところから転職されていたけれど、人どのかかわりであるという仕事の根底は変わらなかったということはよくわかりましたが、学生さんとの接し方で苦勞されたことはありますか？

—銀行の仕事でのお客様とのつながりと、大学の学生さんとのつながりは確かに違うことはあるとは思いますが、こちらに来て困ったことは特にはなかったです。よりつながりが強いというか、一言で表すのは難しいのですが、学生さんとのつながりはとても強いと感じました。今は学長の立場で少し学生さんとは離れてしまっていて、それがいけないなどは思っていますが…

こちらに来た最初のころは事務局長の立場で、よくわからない中で動く中、職員の方、学生さんからも多くのことを教えてもらいながらやってきました。そして、最初にかかわった学生が卒業していくとき、大教室で卒業生へ向けて言葉を贈る時間があったのですが、そのときに絶句してしまいまして感極まったことを思い出しました。ですから、困るというより、自分としてもいろいろなことがわからない中で走り回っている中で、いろいろなつながりが密に持てたのだらうと思います。特に最初の2年間でかかわった学生を送り出したときはそのことを強く感じました。



学長になられてからは難しいと思いますが、事務局長や幼児教育保育科長の時にはどのような形で学生さんの声を集めようとされていましたか。

—学生さんの名前と顔をできるだけ覚えていきました。廊下ですれ違ったりしたときには、「～さん」とか「～君」というように名前呼びかけて「頑張っていますか?」とか少しでも話しかけるようにしていました。今はなかなかできていないので、今後頑張っていかなくてはと思っています。それはとても大切なことだと思います。ちょっとした会話のなかで「こういったことが嬉しいです」とかという言葉が聞こえてきたりしますので。

やはり学長はそういった直接的なコンタクトを大切にされてきたということですね。

—すごく意識はしていました。以前は、対面で行なう英語の授業を3クラス程担当していたこともあり、そのような機会は多く持っていたと思います。今後は違った形でいろいろと工夫していきたいと考えています。



今年は学園創立100周年を迎えましたが、短大の学長としてのお気持ちをお聞かせください。

—100周年ということで学内にたくさんの「100」のペナント等があり、長い歴史の中で今があることを実感するとともに、その100年に立ち会えるというご縁、幸せを感じています。短期大学も、より存在意義を高めて学園の中での一翼を担っていく、そういう存在になるように頑張っていかななくてはならないと思っています。

短大として特別な行事はあるのでしょうか。

—100周年ということでの特別なイベントはありませんが、ご存知のようにキッズスクエアの中に「絵本の部屋」があり、学生が好きな場所として挙げてくれてもいますが、あの部屋をリニューアルしてより有効に活用できるようにしたいと先生方とも考えているところです。

学生、教職員に向けてメッセージ、エールをお願いします。

—教職員の皆さんへとすれば、先ほど申し上げたような「学生さんのために」ということは、皆さん日ごろから奮闘していらっしゃるところで頭が下がる思いですし、感謝申し上げたいと思います。そして強いて言えば、時代の流れの中で変えざるをえないことであるなら、変えていっていただきたいし、良いものはさらに高めていっていただきたいです。それでも受け継がれてきたもの、変えるべきではないもの、建学の精神から得るものとか、学生さんのためにか、そういったことは軸に持っていただきたい。そして、過去にとらわれず変えるべきものは変えていく、これを意識してやっていただければと思います。エールというより自分自身への戒めとしてより強く意識していかななくてはと思っています。また、短大生の多くは保育の現場に行きます。その仕事は何よりも社会に貢献するという仕事です。短大の教職員の皆さんは、そういう学生さんを育て送り出していくという、社会貢献に通じる仕事ということで心に誇りと自信をもって日々ご奮闘いただければと思っています。このことは、申し上げるまでもなくすでにやっていただいているということももちろん承知しています。



とても大事なことです。ふとした時におろそかにならないように気をつけたいと思います。

—学生の皆さんへということであれば、貴重な学生時代に学内のことに限らずいろいろと挑戦して、人間力、感性を磨いて社会に出たときにきらりと輝く人になってもらいたいと思います。それは社会に出てからもいろいろなことを経験して、さらに輝いていく人になってもらいたいと思います。是非失敗を恐れず様々なことに挑戦を続けながら、頑張ってください。

本日はいろいろなお話を聞かせていただき、ありがとうございました。短大の皆さんとこれからも一緒に頑張っていきたいと思います。今後ともよろしくお願い申し上げます。

2024.6.6



私の推薦図書

秋山 徹 先生（声楽・幼児音楽・音楽舞台芸術）



署 名：泣いた赤おに

著者名：浜田廣介

<https://www.kaiseisha.co.jp/books/9784035500506>



署 名：夕鶴

著者名：木下順二

<https://www.kaiseisha.co.jp/books/9784035500506>



署 名：かさじぞう

著者名：瀬田 貞二 再話

<https://www.fukuinkan.co.jp/book/?id=57>

洗足学園創立100周年、誠におめでとうございます。本学の先生方の下で多くの素晴らしい教えを受け、おかげさまで今まで様々なオペラを演唱する機会にも恵まれて来ました。外国の諸作品も素晴らしかったのですが、現在は特に日本人作曲家による、日本語の、それも子どもたちも楽しめるような作品を演唱することに、価値と喜びを感じています。

なぜなら、心に染み入るように一言一句を表現できることや、舞台上まで届く子どもたちの反応とともに作品を創り上げることができるからです。舞台と客席がひとつとなり、子どもたちの純真な心と感受性の豊かさに触れるひときは、何より価値ある時でもあります。

純真な心、感受性の豊かさと言えば、担当している幼児教育保育科の授業でも同様に感じるがあります。童謡、唱歌、手あそび、歌あそび、音楽劇などを実践する学生の姿は、正に純真そのもの。「童心に帰る」と言いますが、大人になっても幼少時の感性を多分に持ち、音楽を楽しんでいることを、いつも素晴らしいと思い、自身もそのような心をつつまでも持ち続けたいと思います。

左記に挙げた作品は、心を動かされるメッセージが込められている、私が愛して止まない日本オペラの原作です。『泣いた赤おに』は松井和彦氏、『夕鶴』は團伊玖磨氏、『かさじぞう』は大江千佳子氏が作曲した素晴らしいオペラ作品ですので、まだご覧になられたことがない方にもぜひご鑑賞いただきたい作品です。

これらの作品を観た子どもたちが、音楽に憧れ、本学で学び、次世代の音楽家として引き続きこのような日本のオペラも大切に受け継いでいってもらえることを願っています。

私の推薦図書

尾根 秀樹 先生（保育学・幼児教育学）

署 名：子どもの表現活動

著者名：岡田陽

出版社：玉川大学出版部

ISBN：9784472095313

<https://www.tamagawa-up.jp/book/b27631.html>



保育者を志す皆さんにおすすめしたい本は、『子どもの表現活動』という本です。著者は、海外のドラマ教育にも精通しており、日本の保育における表現教育に、大きな影響を与えた岡田陽先生です。

小学校以上の教育では「教科」の指導というものがありますが、保育では「5領域」というものを育むことが求められます。その中の1つが領域「表現」です。しかし、表現とは、とても曖昧であり、主観的な部分もあり、捉え方が人によって様々です。そのため、領域「表現」を保育の中で指導していくということは、大変難しい部分があります。

本書では、「子どもの表現とは何か」をとことん追求し、大変わかりやすく領域「表現」について記されています。人間は、内面があるからこそ、それをある技術（描く、歌う、作る、動く、話すなど）を用いて外へ表すと述べており、人間の豊かな内面形成に主軸をおいた表現教育論を学ぶことができます。私は本書に出会えたおかげで、子どもに無理強いするのではなく、子どもたちが主体となって行える表現活動が子どもの心を育むのだと学ぶことができました。30年前に出版されたとは思えないほど、現代にも通じる素晴らしい本です。

昨今、コロナ禍で人と人との関わりが希薄化し、子どもたちの「表現力の低下」が叫ばれています。また、デジタル化が急速に進み、より、人間の表現力が注視されていく時代に入っていくと思います。子どもの人間形成における大切な時期に関わる皆さんには、ぜひ、この本から「子どもの本当の表現」について学び、素晴らしい保育者になってほしいと思っています。

洗足こども短期大学での学び「ピアノ」

柴田 美奈 先生（ピアノ）

洗足こども短期大学のピアノの授業は、音楽大学併設という恵まれた環境で学びます。どこからともなく聴こえてくる音楽、四季折々の樹々や花々が咲き誇るキャンパスを抜け、短大生は音楽大学のレッスン室に向かいます。

一年次のレベル別グループレッスンでは、直接指導を受けている時だけでなく、ほかの学生さんが弾いている時も一緒に指を動かし、積極的に授業に参加しています。音楽は楽しく学ぶことが理想ですが、ピアノの基礎を習得するには地道な練習の積み重ねが必要です。授業を重ねるごとにピアノを弾くことに慣れ、友達の演奏から学びを得ていきます。またポイントを押さえた練習により、ピアノに慣れていなかった学生さんも、次第に音楽を演奏する喜びを感じられるようになっていきます。予習復習にも励み、授業の合間には友達どうして課題の内容について確認しあうというように、真摯にピアノに取り組み、共に上達を目指す姿がみられます。二年次の個人レッスンでは、一人ひとりに合わせた方法で学習を進めていくことができるため、一年次に培われた基礎を生かし、さらに表現力豊かな演奏ができるようになっていきます。

教育実習では現場でピアノを弾く機会も多いため、実習前のレッスンは実習課題曲を練習します。難しい課題曲の場合は、準備が間に合わないことも時にはあります。不安を抱えながら実習の初日を迎えた学生さんが、実習期間中に徐々に弾けるようになり、「楽しく実習を終えることができました！」と笑顔で報告に来てくれたとき、その成長を心より嬉しく思います。入学時からの練習の積み重ねが結実し、大きな自信となったことが感じられます。

ピアノの授業はピアノの演奏力をつけることが目標ですが、その過程で得る様々な学びが保育者となられた時に大きな意味をもつものとなるでしょう。音楽に満ち溢れたこの学舎で、ピアノを通して豊かな創造力と人間性を育み夢かなえ、保育者として輝かれることを願っています。





幼教ピアノ 授業風景

この授業では、保育の現場で必要となるピアノ演奏の基本を学びます。ピアノ経験量に基づき、初心者から上級者まで5段階のグレード別クラスで行っています。



ワークショップ風景

保育・子育て研究所主催にて、
本学卒業生で保育士・プロ紙芝居師として活躍されている
ゴリラ先生こと半田拓也さんを講師に「多様な保育」を学びました！



1年生全員、クラスごとに、実習や実践にすぐに役立つ絵本や紙芝居の選び方・演じ方、子どもと楽しくコミュニケーションをとるテクニックなどを教えていただきました。一人ひとり、紙芝居型のポケットシアターも作成しました！



学生の感想

「みんなで声を出してクイズに参加したり、反応したりして参加しながら見たのが楽しかったです」

「子どもに大人気なゴリラ先生の様子が想像できました。ゴリラ先生も紙芝居の一部のような、明るくて元気な口演でとても面白かったです」

「読み手と聞き手が一体となって楽しめるのが、すごくいい雰囲気でした。楽しかったです」

「ゴリラ先生に元気と工夫をたくさんもらいました！」

ゴリラ先生のInstagramも要チェックです
[@kamishibai_gorilla_sensei](https://www.instagram.com/kamishibai_gorilla_sensei)